

令和7年 6月2日	農作物病虫害発生予報 6月	山口県病虫害防除所 山口県農林総合技術センター
--------------	--------------------------	----------------------------

～目次～

I	予報の概要	1
II	予報	
	【主要病虫害】	2
	【その他の病虫害】	8
III	参考(予報の見方、気象予報)	9

I 予報の概要

農作物名	病虫害名	予想発生量	現況	
			平年比	前年比
イネ	縞葉枯病	平年並	—	—
カンキツ	かいよう病	やや多	やや多	多
	黒点病	平年並	—	—
	ミカンハダニ	少	少	少
ナシ	黒斑病	多	多	多
	黒星病	平年並	平年並	少
果樹全般	カメムシ類	やや少	やや少	少

お問い合わせ先

TEL (0835) 28-1211

FAX (0835) 38-4115

E-mail a172011@pref.yamaguchi.lg.jp

Ⅱ 予報

【主要病害虫】

イ ネ

1 イネ縞葉枯病

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
平年並	—	—	移植時（箱施用剤） 多発時には幼穂形成期までの本田防除

(2) 予報の根拠

- ア イネ縞葉枯病を媒介するヒメトビウンカの5月下旬のコムギの20回すくい取り調査では、成幼虫数は63.5頭(平年77.0頭)で平年並みであった(±)。
- イ 昨年、イネ縞葉枯病の発生は認められなかった(－)。
- ウ 現時点でヒメトビウンカの多飛来は認められていない(－)。
- エ 気象予報では、気温は平年並か高い(+)。

(3) 防除対策

<耕種的防除>

- ア 休耕田の雑草等はすき込み、畦畔の雑草を刈り取る。
- イ ヒメトビウンカの増殖源であるイネ科雑草、イネ科牧草、ムギ類等の周辺で育苗しない。
- ウ イネの生育初期に発病が認められた場合は、できるだけ発病株を抜き取る。

<防除のポイント>

- ア 移植時にウンカ類に効果のある箱施用剤を使用する。
- イ ヒメトビウンカは、6月上旬に多飛来することがあるので、今後の予察情報に注意する。

カンキツ

1 かいよう病

令和7年3月27日付け令和6年度農作物病害虫発生予察技術資料第13号参照

<https://www.pref.yamaguchi.lg.jp/soshiki/122/22318.html>

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
やや多	やや多	多	6月上旬、6月下旬

(2) 予報の根拠

ア 5月下旬の巡回調査では、新葉での発生ほ場率5.3%(平年2.1%)、発病葉率0.1%(平年0.1%)、発病度0.0(平年0.0)でやや多かった(+)。

イ 気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年並か多い(+)。

(3) 防除対策

<耕種的防除>

ア 発病した枝や葉は伝染源となるので、できるだけ除去する。

イ 防風樹や防風ネットなどの防風対策を行う。

<防除判断>

ア 南津海、いよかん、ネーブル等の発病しやすい品種で開花後の防除を実施していない場合は、6月上旬と6月下旬の2回防除を実施する。

イ 発病しやすい品種で、既に開花後の防除を実施している場合は、6月下旬に防除を実施する。

<防除のポイント>

コサイド3000やZボルドーなどの無機銅水和剤を散布する場合は、薬害を低減するため炭酸カルシウム水和剤(クレフノン)200倍を加用する。

2 黒点病

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
平年並	—	—	1回目 : 6月上旬 2回目以降: 防除後の累積降水量が200~250mmに達したとき、または薬剤散布後1か月を経過したとき

(2) 予報の根拠

気象予報では、降水量は平年並か多い(+)

(3) 防除対策

<耕種的防除>

剪定枝や樹上の枯れ枝は、伝染源となるので、できるだけ除去するとともに、園外に持ち出し処分する。

<防除判断>

予防散布が基本なので、予報内容の防除時期に合わせて防除を実施する。

<防除のポイント>

「せとみ」は病斑が大きくなり、外観に及ぼす影響が大きいため、防除時期が遅れないように留意する。

3 ミカンハダニ

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
少	少	少	防除の目安を超えたとき (防除の目安) 雌成虫の寄生葉率30～40%以上 または雌成虫 1 葉当たり 0.5～1頭以上

(2) 予報の根拠

ア 5月下旬の巡回調査では、発生ほ場率0%(平年13.1%)、寄生葉率0%(平年2.1%)で平年に比べ少なかった(一)。

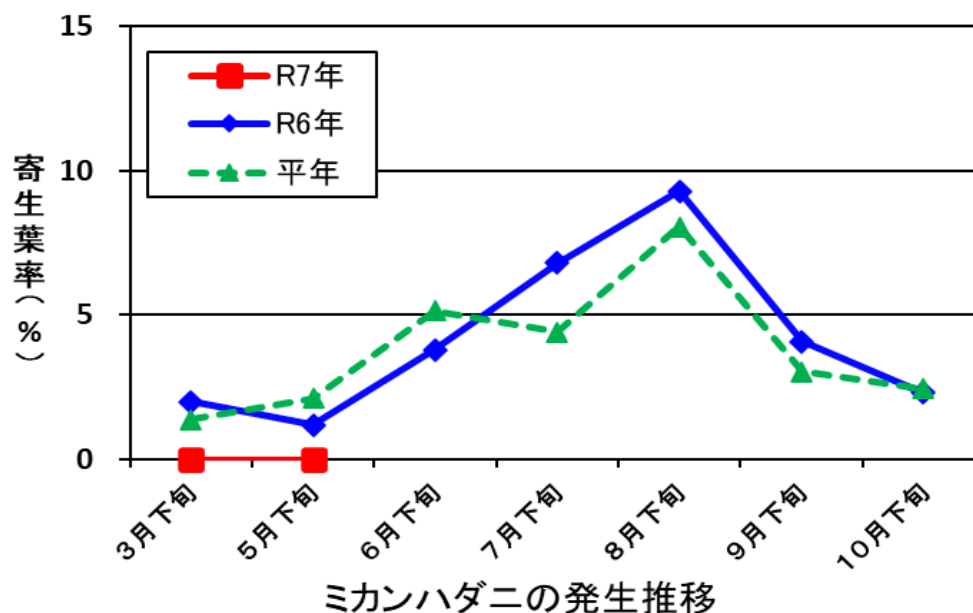
イ 気象予報では、6月の気温は平年並または高く、降水量は平年並または多い(±)。

(3) 防除対策

<防除のポイント>

ア 発生量は、ほ場によって大きく異なり、冬期、春期のマシン油乳剤による防除を行っていない園で多発することがある。また、気温の上昇に伴い急激に密度が増加することがあるため、定期的にはほ場を見回り、発生状況を確認する。

イ ハダニ類の天敵を保護するため、6月中～下旬のハダニ防除は、マシン油乳剤を散布する。ただし、樹勢の弱った樹は、旧葉が落葉することがあるので避ける。



1 黒斑病

令和7年5月30日付け令和7年度農作物病虫害発生予察技術資料第2号参照

<https://www.pref.yamaguchi.lg.jp/soshiki/122/22318.html>

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
多	多	多	6月上旬、中旬、下旬

(2) 予報の根拠

ア 5月下旬の巡回調査では、発生ほ場率44.4%(平年0%)、発病葉率1.2%(平年0%)、発病新梢率0.3%(平年0%)で平年に比べ多かった(+)。

イ 気象予報では、降水量は平年並か多い(+)。

(3) 防除対策

<防除のポイント>

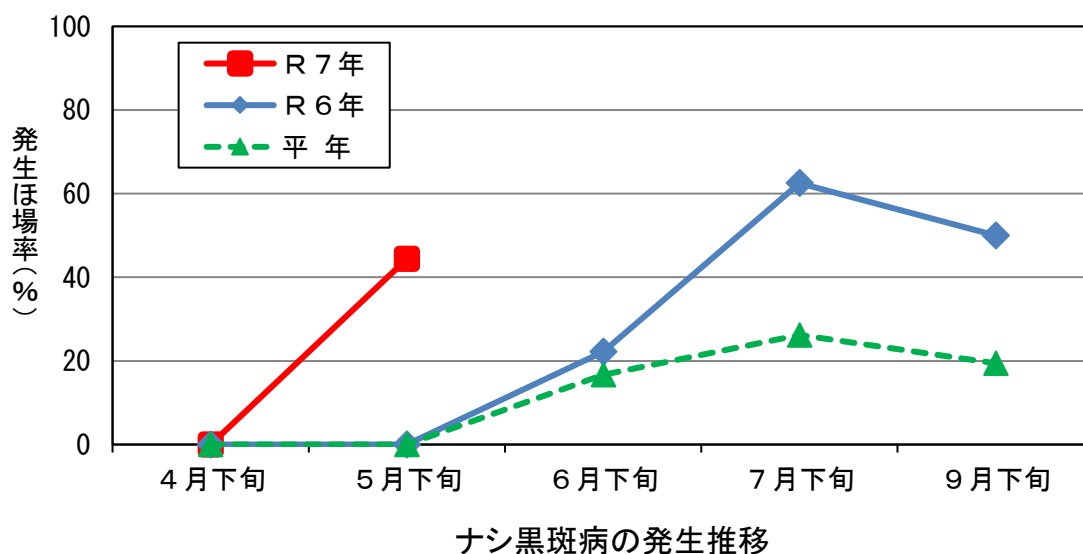
ア 小袋掛けが完了していないほ場では、できるだけ早く小袋掛けを終える。

イ ほ場を定期的に見回り、落下した果実は拾い集め、園外に持ち出し適正に処分する。

ウ 梅雨期は散布間隔が空きすぎないように注意し、徒長枝の先端まで薬剤がかかるよう丁寧に散布する。

エ 窒素過多は発生を助長するため適正施肥に努める。

オ 同一系統の薬剤の連用は避ける。また、ポリオキシシン剤、クレソキシムメチル剤の耐性菌が県内で確認されているので、効果が認められない場合は他の薬剤を選択する。



2 黒星病

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
平年並	平年並	少	7～10 日間隔の散布を7月上旬頃まで

(2) 予報の根拠

ア 5月下旬の巡回調査では、発生ほ場率6.7%(平年8.7%)、発病葉率0.2%(平年0.2%)で平年並みであった(±)。

イ 気象予報では、降水量は平年並か多い(+)。

(3) 防除対策

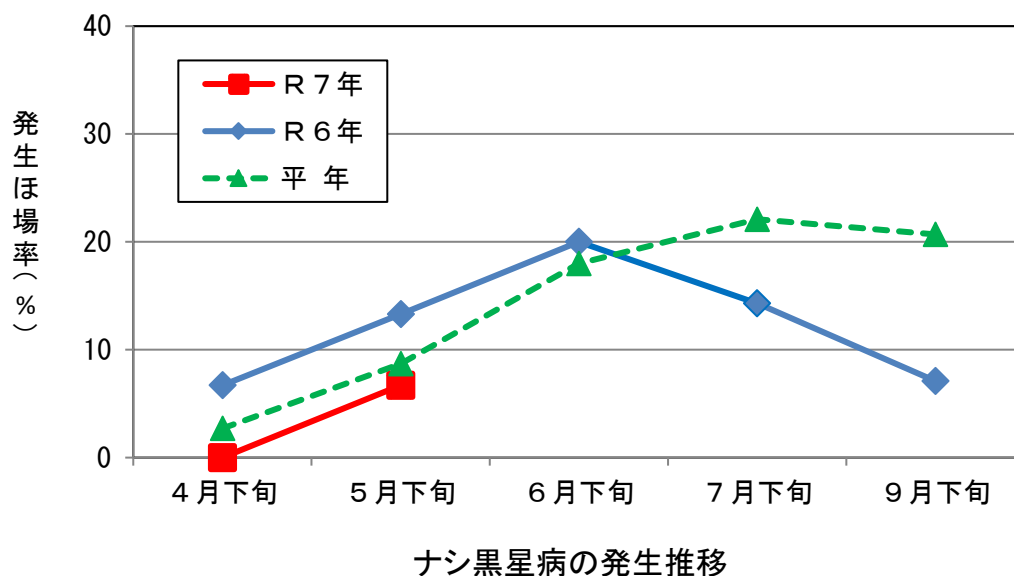
<防除のポイント>

ア 発病した果実と葉は伝染源になるので、見つけ次第除去し、ほ場外に持ち出し適切に処分する。

イ 薬剤が果実と新梢にかかるように、丁寧に散布する。

ウ DMI剤(殺菌剤コード3)には耐性菌が出現しているので、防除の後必ず防除効果を確認し、防除効果が劣る場合は、他の薬剤を使用する。

エ 薬剤耐性の発達を防止するため、同一系統の薬剤を連用しない。



果樹全般

1 カメムシ類（チャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシ、クサギカメムシ）

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
やや少	やや少	少	園地への飛来を確認した時

(2) 予報の根拠

- ア 予察灯（県内3か所、4月26日～5月25日合計）における誘殺数は18頭（平年88.5頭）で平年並みであった（±）。
- イ フェロモントラップ（県内4か所、5月1日～25日合計）によるチャバネアオカメムシの誘殺数は38頭（平年272.0頭）で平年に比べやや少なかった（－）。
- ウ クサギカメムシの隙間トラップによる越冬量調査（10か所）では、1トラップ当たり3.1頭（平年30.9頭）で平年に比べ少なかった（－）。
- エ 気象予報では、6月の気温は平年並または高い（＋）。

(3) 防除対策

<耕種的防除>

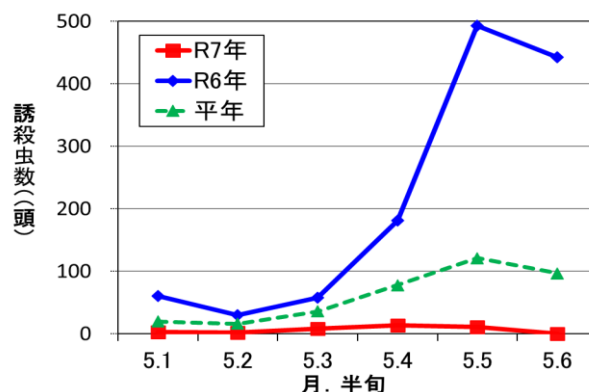
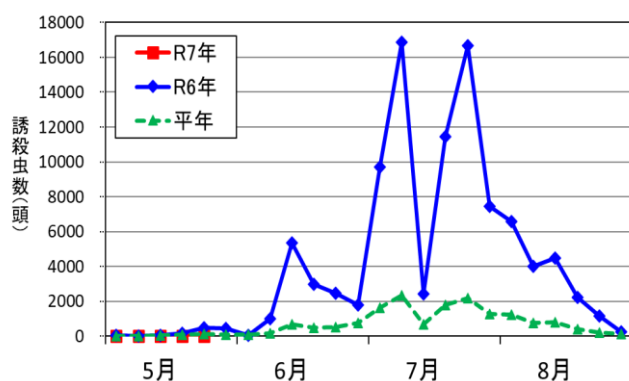
- ア ネット（網目4mm以下）で園全体を覆い侵入を防ぐ。
- イ 有袋栽培では大きめの袋、二重袋を使用し、袋かけは遅れないように行う。

<防除判断>

- ア 飛来時期や飛来量が園地によって異なるので、病害虫発生情報による県内全域の発生状況を参考にするとともに、園地にライトトラップを設置するなどして飛来を把握し、適期防除に努める。

※ 「園地内ライトトラップを利用した果樹カメムシ防除対策マニュアル（簡略版）」を山口県病害虫防除所ホームページ「主な病害虫の発生生態と防除対策資料」に掲載

※ (<https://www.pref.yamaguchi.lg.jp/uploaded/attachment/61925.pdf>)



フェロモントラップにおけるチャバネアオカメムシの誘殺数
(県内4カ所合計)

【その他の病害虫】

作物名	病害虫名	予想 発生量	現況		発生ほ場率		備考
			平年比	前年比	本年 (%)	平年 (%)	
イネ	イネミズ ゾウムシ	平年並	平年並 (予察灯)	少 (予察灯)	—	—	箱施用剤による防除 を行う。 箱施用剤により防除 を行わなかったほ場 で成虫密度が100株 当たり50頭以上であ れば本田剤による防 除を行う。
	ニカメイ ガ	平年並	平年並 (予察灯)	前年並 (予察灯)	—	—	前年、巡回調査ほ場 では発生未確認
カンキツ	そうか病	多	多	前年並	15.8	5.3	令和7年3月27日付 け令和6年度農作物 病害虫発生予察技術 資料第13号参照 https://www.pref.yamaguchi.lg.jp/sos/hiki/122/22318.html <u>1</u>
ナシ	赤星病	少	少	少	0	7.3	

Ⅲ 参考

1 予報の見方

(1) 病虫害発生量の基準（原則として過去10年間の発生量と比較）

ア 平年比

多	過去10年間で最も多かった年と同程度以上の発生
少	〃 で最も少なかった年と同程度以下の発生
やや多	〃 で2～3番目に多かった年と同程度の発生
やや少	〃 で2～3番目に少なかった年と同程度の発生
平年並	〃 で標準的にみられた発生（上記4項目を除くもの）

注：過去の発生量との比較を表わすもので、被害や防除の必要性とは異なる）

イ 前年比

多	平年比の5段階評価で区分し、前年の評価より多い発生
少	〃 前年の評価より少ない発生
前年並	〃 前年の評価と同等の発生（上記2項目を除くもの）

(2) 病虫害発生時期の基準（原則として過去10年間の発生時期と比較）

早 い	過去10年間の平均値より6日以上早い
遅 い	〃 より6日以上遅い
やや早い	〃 より3～5日早い
やや遅い	〃 より3～5日遅い
平年並	〃 を中心として前後2日以内

(3) 予報根拠における発生要因の評価基準

+	発生を助長する要因
±	発生の助長及び抑制に影響の少ない要因
-	発生を抑制する要因

2 気象予報

(1) 概要

1 か月気象予報（5月29日福岡管区気象台発表）

予 報	低 い (%) 少ない	平年並 (%)	高 い (%) 多い
気 温	2 0	4 0	4 0
降 水 量	2 0	4 0	4 0
日照時間	3 0	4 0	3 0

週ごとの気温傾向

予 報	低 い (%)	平年並 (%)	高 い (%)
1 週 目	6 0	3 0	1 0
2 週 目	2 0	4 0	4 0
3～4 週 目	2 0	3 0	5 0